

# 「厳しい指導は必要」という学生の声を どのようにとらえどう応えるのか

——生徒指導上の不適切な指導と考える例をめぐって——

法政大学キャリアデザイン学部/社会学部 兼任講師 遠藤 裕子

## 課題設定

2022年(R.4)12月、12年ぶりに生徒指導提要が改訂され、担当する教育相談の授業では教育相談に関するページ(P83-P96)を中心に取り扱い、教育相談における基本姿勢となるカウンセリングマインドに関連して「不適切な指導と考える例」にふれている。この内容は、昨年度(23年度)の授業で初めて取り扱ったが、学生のリアクションペーパー(以下、RP)に「厳しい指導は必要だ」というような記述が少なくない数あることに気がついた。教育心理学の授業で扱う「教師の役割」では、教師のあり方が学級風土に及ぼす影響について「教師の機嫌の悪さ」や「教師の疲労が醸し出す空気」などで教室の雰囲気が悪くなることに言及する記述が毎年散見される中「厳しい指導は必要」という学生の声に違和感を覚えた。その声をどのようにとらえどう応えるのかを課題とする。

研究の方法は2024年度春学期に多摩キャンパスにおいて、教職課程・教育相談の授業を受講した学生115名のRPの記述のうち「不適切な指導と考える例」(資料2)に関連するものを資料(資料1学生のRPの記述)とし考察することとする。

## 【1】「不適切な指導」はなぜ繰り返されるのか

### 1. RPの記述にみる「不適切な指導」の実態

資料1を参照しながら考察していく。「不適切な指導」(資料2)に関わって記述した学生29名の内、怒鳴るなど「不適切な指導」にあたると思われる指導を受けた経験があり否定的な記述をした学生は9名で、部活動以外が3名、部活動内が4名、学校外の活動(スポーツ系)が2名であった。

部活動以外では01「日常の教育活動の場における指導の中で、毎回怒鳴る」01「生徒のみならず後輩の先生をみんなの前で怒鳴る」02「連帯責任のように大声で全員に聞こえるように怒鳴る」03「運動会の練習の時マイク越しに名指しで怒鳴る」などが行われていたことがわかる。部活動内においては04「バカという文言、退部に追い込むほどの暴言」07「高校生への

体罰や暴言、部員全員が退部」などひどい扱いを受けたことがわかる記述がみられる。また学校外の活動(スポーツ系)においても、08「練習からピリピリした雰囲気、顔にボールを当てられる」09「必要以上に走らせる」などの記述があった。もはや「指導」とは呼べないほどの酷い状況があり、教育の現場では絶対にあってはならない対応だと言える。このような対応をしないと指導にならないとは到底考えられない。それにもかかわらず、なぜこのような「不適切な指導」が行われるのだろうか。

## 2. 「叱る依存」のメカニズム

臨床心理士・公認心理師である村中(2024a)は自身の仕事との関連で脳科学や認知科学を学ぶ中「誰かを罰することで、脳の報酬系回路は活性化する」という研究報告に衝撃を受け、脳科学の視点に専門である心理学の知見を加え「叱る依存」という言葉を用いて、人が他者を叱るということについてのメカニズムを説明している。「叱る」という行為は多くの場合、叱られた人の回避行動を引き起こす。「叱られる苦痛」から逃れようとして従っただけかも知れないのに、叱った人には叱ったことへの報酬となり、自己効力感が高まる。こうして「叱る」という行為を繰り返すようになる。「叱る」という行為には依存性があり、どんな人でも環境さえ整えば「叱る依存」の落とし穴にはまってしまう可能性が十分にあるとしている。

そうであるとすれば、特に部活動においてはどんなに理不尽な叱り方をしても生徒が従うことで、それが叱った方の成功体験になり、叱る方に大きなダメージを与えるくらいの抵抗や反抗がない限り、指導とは言えない指導が繰り返され、エスカレートしていくことも考えられる。

## 【2】「厳しい指導は必要」という声をどのようにとらえるか

### 1. RPの記述にみる「厳しい指導は必要」の実態

「不適切な指導」に関わって記述した学生29名の内、「厳しい指導は必要」とする記述した学生は6名で、部活動関連以外が3名、部活動関連が3名であった。

部活動関連以外では10「また怒られたくないという感情からいじめをしなくなるといった良い面もっている」11「教員がそうしてしまう気持ちも理解することができる」12「少し怒鳴るのは必要なかもしれないと思う（子育てにおいて）」という記述がみられた。

部活動関連では13「どんなに忙しくても辛くても、あのときに比べたら全然マシだと感じ、何にも負けないメンタルが身についたと思っている」15「チームで動いて、チームでひとつの目標に向かっていっているものに対して、同じ方向に向かっておらず、別のベクトルに向いている生徒は叱る必要があると思う」15「怒られているときは嫌だなと思っていたけれど、成長するにつれ、メンタルが強くなり、何にでも挑戦できる生徒になれた」という記述があった。

## 2. 指導者（教育者）にかかるプレッシャー

前出の村中は、厳しく叱る姿勢が熱意や愛情の証拠だと見なされ、きちんと叱れないような指導者、教育者は「未熟だ」「（指導する相手に）舐められているからうまくいかない」などと評価されることがあるとし、「叱らないと（社会から）叱られる」というプレッシャーが存在しているとしている。また2012年に高校のバスケットボール部で起きた顧問からの繰り返しの暴力を受けた男子生徒が自ら命を絶ってしまった事件を取り上げ、指導という名の「暴力」を支える人たちの存在があることを指摘する。この事件をめぐる暴行があったことは否定しがたい事実として認めておきながら「人として大切なことを教えてくれた」「先生のおかげで社会でも通用する強い人間になった」などの論調で顧問を擁護し、顧問への寛大な処分を求める嘆願書が提出されている。

人ひとりの命が失われてもなお「厳しい指導」を是認するのはなぜなのだろうか。学生の記述にも「何にも負けないメンタルが身についた」「メンタルが強くなり、何位でも挑戦できる生徒になれた」とある。「どんなに忙しくても辛くても、怒られている時よりはまし」「怒られているときは嫌だなと思っていたけれど」というにもかかわらずである。

## 3. 「きちんと指導することが必要」とする声の検討

2-1の記述のほど強い主張ではないが、3. その他の14名の記述にも「厳しい指導」を是認する声が見られる。16「中・高一貫の男子校。男子校の中学生を言葉で諭すことは不可能。（中略）大抵の場合はむしろなめられてしまう。実際、どの先生も声を荒げていた」19「指導する際に体罰をするのはもちろんよくない指導方法だが、だからといって優しくすぎたり指導しなさすぎても、教師と生徒という関係が崩れてしまうと感

じた」24「優しく指導しても、小さい子などはやんちゃな時期であったら、言うことを聞かないかもしれない」29「自分が中学生のとき、怒鳴られた経験がある。そうやって怒鳴られたからこそ、自分の誤りを認めることができ、今の自分につながっていると考えている」がそれにあたる。これらの「きちんと指導することが必要」という声を丁寧に検討する必要があると考える。

## 4. 教育の場における「叱る」のあり方

一般的には「叱る」は相手の成長や改善を促すために注意やアドバイスをすることとし、感情的に自分の怒りをぶつけることを「怒る」として区別されていて「怒るのはダメだが叱ることは必要」というように言われることがよくみられる。村中（2024b）は「叱る」という言葉は多義的であるとして、「言葉を用いてネガティブな感情体験を与えることで、相手の行動や認識の変化を引き起こし、思うようにコントロールしようとする行為」と定義した。この定義においては「叱る」も「怒る」も同義であると言える。

教育の場においてはトラブルも生じるわけで、当然指導することが必要になる。このような場合にはどのような「叱る」が必要なのか。これについては、文中、村中と対談した工藤勇一氏（元横浜創英中学・高等学校校長/元東京都千代田区立麴町中学校校長、以下工藤）の「僕の叱り方は村中さんの『叱る』の定義からするとみ出している。相手にネガティブな感情を抱かせないこと、相手をコントロールしようとするのではなく、状況を自分で解決していくための支援をすること、この2つをモットーとしている」という発言が教育の場における「叱る」のあり方を示しているように思う。

藪下ら（2024）は「世界からの押し返し」という言葉を用いて「正しく叱ること」の必要性を説明し「世界からの押し返し」の不足が環境への不適応を招くとしている。この「世界からの押し返し」は工藤が言うところの「状況を自分で解決していくための支援」に通じることがあると読み取れる。藪下らは自らも含め、多くの大人は思いのほか「世界からの押し返し」ができていないと指摘する。大人（親や先生・学校、以下大人）が「思い通りにならない環境」として立ちあがると子どもには不快な感情が芽生え、大人はその不快な感情と対峙しなくてはならなくなり、それには相応のエネルギーを必要とするからであるとする。「世界からの押し返し」になっていない大人の対応とそこから生じる問題については、次のような例を挙げている。パン屋さんで子どもが未会計のパンに触れようとしたときに「店員さんが怒るからやめよう」と言う。これを押し返しの「外注」と呼び、これをすることで、本来親との間に生じる不快感を親との間で収める

という体験ができなくなるとしている。以上は親の対応の例であるが、藪下はスクールカウンセラー（以下、SC）の立場から「押し返し」ができない教師が見受けられるようになっており、そのことも様々な不適応を招く一因になっているのではないかと指摘している。

## 【2】「厳しい指導は必要」という声にどう応えるのか

3-(3)で述べたとおり「厳しい指導は必要」という声は「指導すべきときにはきちんと指導してもらいたい」ということではないかと思われる。もちろん【1】-1で取り上げたような指導とは呼べないようなやり方は否定したい。【1】-2で記述した「叱る依存」のメカニズムがあることをふまえると、指導者（教育者）はこのメカニズムを十分に理解した上で「依存」に陥らないようにしなければならぬし、同時に社会からかかるプレッシャーを是正していく必要があると考える。

「きちんとした指導」は【2】-4で取り上げた「世界からの押し返し」を大人が正しく行うことに他ならないと考える。これは怒鳴ることで、村中の言うところの「叱る」でもない。工藤の言う「頭ごなしにこちらの価値観や願望を押しつけて叱るのではなく、問いかけを糸口にして対話をする」ということになるだろう。

学生の記述の中にもヒントがある。資料2の3.その他～19「怒鳴ったりするとその場や即時での指導効果はあるが、長い目で見ると生徒の心理的恐怖によって指導するよりも、冷静に生徒と対話するように指導すると良いと感じた」26「生徒が精神的にも健康に育っていくためには、まず教師側のストレスを減らしていくことから始めるべきだと思う。「怒る」のではなく「指導し理解してもらおうこと」を優先していくべきだと考えた」27「怒鳴るということは、先生から生徒へ一方的に主張することであり、生徒の主張をねじ伏せることと同じである。そのため生徒は深く鮮明にふり返ることはできない。しかし語りかけるように理知的に怒る先生は、生徒自身になんで？ どうして？ と問いかける。そして発言させる。そのため嫌でもふり返らざるを得ないような状況を促すことができる。私は怒鳴るようなことはしないし、できないと思う」ここには対話や語りかけ、問いかけと発言させることという文言が並んでいる。

RP記述した学生が4年生だとすると、彼らが小・中学生だったのは10年ほど前だと思われる。状況は変化しているのか、あるいは変わっていないのか。今

津（2014）の著作をあたってみた。その中には体罰問題が大きく取り上げられ、かなり激しい事例が挙げられている。またいじめ問題と体罰問題を並列しその解決法を論じている。ポール・ディックス（2024）はイギリスでのことであるが「今なら逮捕されるが、20年前は教師が子どもの胸ぐらをつかんで壁に押しつけていても誰も疑問を感じなかった。10年前でも居残りを撤廃して対話主義の生徒指導をすれば鼻であしらわれたと思う」と言う。この2つの著作でみるかぎりにおいて、この10年くらいの間に「不適切な指導」はかなり社会問題化されたと言える。その流れの中で、2022年の生徒指導提要の改定にあっても言及されることとなったのではないかと考える。

「厳しい指導は必要」という声には、指導すべきときにはきちんと指導することが必要であるが、それは「不適切な指導と考え得る例」にあるような方法ではなく、大人がしっかりと向き合い、言葉を尽くして対話する中で行うことであると伝えたい。

## 今後の課題

今回の研究は、2024年度春学期に多摩キャンパスにおいて教職課程・教育相談の授業を受講した学生のRPへの記述を資料として行ったものである。ここにはスポーツ健康学部の学生が多く含まれており、部活動を始めとする体育会系の活動における影響をかなり受けていると推察される。秋学期は市ヶ谷キャンパスで同じ授業を行なったが、比較して「厳しい指導」に対して肯定的なとらえ方は薄いように感じている。執筆の時期の関係でいねいな分析を行っていないので今後の課題としたい。

また、部活動など体育会系の活動における「好ましい指導」については、05「私は中学生のときにバレー部に所属していたが、何度か数えきれないほど怒鳴られた。また理不尽に怒られることも多く、先生の気が済むまで走らされることもあった。（中略）一方、駅伝部にも所属していたが、駅伝部の先生は生徒一人ひとりと向き合ってほめてくれる先生だった。駅伝部の練習はバレー部と同じくらいキツかったが、その先生のおかげで練習はとても楽しかった。中学生にもなれば論理的に考える能力も身につけているので、怒鳴って従わせるということは本当に無意味なことだと思う」08「高校の部活ではボトムアップが取り入れられ、いわゆる弱小で成績を残せなかったものの、考える力が養われ、人間的にとっても成長できたと感じている」という学生の記述から学ぶところが大きい。今後さらに深めていきたいところである。

## 資料

### 資料1 学生のRPの記述

対象：2024年度春学期に多摩キャンパスにおいて、  
教職課程・教育相談の授業を受講した学生

記述の数：受講生115人の内、関連した記述が見られた29名分

記述内容の内訳：1. 怒鳴るなど「不適切な指導」にあたると思われる指導を受けた経験があり否定的な記述をしている。(9名) 2. 怒鳴るなど「不適切な指導」にあたると思われる指導を受けた経験があるが「厳しい指導は必要」とする記述をしている。(6名) 3. その他(14名)

備考：学生のRPの記述について、以下の加工を施した。

① 文体を常体で統一した。② 明らかな「てにをは」の誤りは修正した。

1. 怒鳴るなど「不適切な指導」にあたると思われる指導を受けた経験があり否定的な記述をしている。

9名

1-1 部活動以外 3名

01 私が中学生のとき、生徒を叱る場合、毎回怒鳴る先生がいた。生徒だけでなく後輩の教師をみんなの前で怒鳴ったりしていた。今考えると、そのような教師は「不適切な指導」について言及がなかったから存在していたのではないか。生徒指導提要の改定により減ることを願っている。

02 小学校や中学校で何人かが大声でしゃべっていると連帯責任のように全員に聞こえるくらい大きな声で怒鳴っていたことがとても印象に残っている。(自分は) 悪くないのに怒鳴られた気持ちになり、今でも先生に怒られている人を見ると思い出して嫌な気持ちになる。

03 小学校の運動会の練習の際、ダンスの振り付けを間違えただけで、全校生徒の前でマイク越しに名指しで怒られた経験がある。その記憶が今でも悔しくて忘れられない。小学生ながら、当時、将来自分は子どもに対して、こんな理不尽な怒り方は絶対にしないと決めた。

1-2 部活動内 4名

04 私自身、高校の部活で、試合のとき、先生の思い通りにプレイができないと「バカ」とか「何やってんだよ」と怒鳴られたことが何度もあっ

た。私は精神的にダメージを大きく受けずに続けてことができたが、後輩は顧問から怒鳴られすぎて何人も退部してしまった。怒られることにより頑張ろうと思う人ばかりではない。

05 私は中学生のときにバレー部に所属していたが、何度か数えきれないほど怒鳴られた。また理不尽に怒られることも多く、先生の気が済むまで走らされることもあった。当時、部員からその先生は全く慕われていなかった。一方、駅伝部にも所属していたが、駅伝部の先生は生徒一人ひとりと向き合ってくれ、ほめてくれる先生だった。駅伝部の練習はバレー部と同じくらいキツかったが、その先生のおかげで練習はとても楽しかった。中学生にもなれば論理的に考える能力も身につけているので、怒鳴って従わせるということは本当に無意味なことだと思う。

06 中学のバスケット部で、先輩の言い分しか聞いてもらえなかったり、試合中に怒鳴られて暴言を言われたりしたことを思い出した。すごく嫌な思いをしたので、自分は絶対にしないと決めている。

07 高校生のときの部活で体罰や暴言を受けていて、全員で退部した経験があり、生徒指導提要の改定は良いことだと思った。私が教師になった際には、自分のような経験をする人がいなくなって欲しいので、時代に合わせて変化させていくことは大切だと思った。

1-3 学校外の活動(スポーツ系) 2名

08 私は野球を長く続けていた関係で、学校のみならず、様々な形の指導を受けてきた。中学在学時のクラブチームはとても圧迫的な空気で、練習からとてもピリピリした雰囲気だった。何度も怒鳴られ殴られてきたが、結果的にこれ以上ないという結果を残すことができた。今考えると、そのチームはコーチが3人いて、ひとりには前述のようなとても怖い方、ひとりにはユーモアがありながらやるときはやるという方、もう一人は熱血だが現代風の指導をしてくださる方で、バランスが取れていたと言えるのかもしれない。しかし当時は成績を残すまでは毎日辞めたいと思っていた。高校の部活ではボトムアップが取り入れられ、いわゆる弱小で成績を残せなかったものの、考える力が養われ、人間的にとっても成長できたと感じている。一概にど

ちらが正義とはいえないが、このように対極的な指導を受けてきた、受けてこられたからこそ、双方のメリット・デメリットを理解しているつもりである。ただ学校教育に関して言えば、寛容な心をもって、決めつけることのないような指導を心がけたいとつくづく思う。

- 09 今日の講義で印象に残ったことは「マルトリートメント」である。私は小学校の頃、バレーボールのクラブチームに入っており、そのチームの監督は怒鳴る、ボールを顔に当てる、必要以上に走らせるということを選手にさせていた。私は小学生ながら、監督の指導には違和感を感じており、うまく避けていた。その人は当時30代半ばくらいの年齢で、学生の頃には同じように、あるいはもっとひどい暴力に近い指導を受け、結果を出したから、そのような指導を私たちにしていたのだと思う。確かに自分が成功した方法を同じように使うのは、経験に基づいたことであり、貴重だとは思いますが、その考え方・やり方を押し付けるのは違うと思う。時代や文化は変わるものであり、現代においては変容ぶりがすごいです。その変化に完全に適応するのは難しいが、現代の風潮を受け入れつつ、自分軸をもった大人になりたい。

## 2. 「厳しい指導は必要」とする記述あり 6名

### 2-1 部活動関連以外 3名

- 10 個人的には怒鳴るという行為について、そんなに悪いことだと考えておらず、理由なく怒鳴ることが問題だと考えた。例えば、いじめをしていた子どもに怒鳴れば、また怒られたくないという感情からそういったものには臆病になり、いじめをしなくなるといった良い面も持っているため、怒鳴ることはそんなに悪くないと考えた。
- 11 不適切な指導についての言及で、具体例が挙げられていたが、教員がそうしてしまう気持ちも理解することができると考えられる。教員の指導法についての相談ができる環境はそういう意味からも必要だと理解した。
- 12 私は父から時に怒鳴られて育ってきた。古臭い考え方かもしれないが、子育ての観点からみると、少し怒鳴るのは必要なのかもしれないと思う。(あくまでも子育てにおいて) 教育的観点からみると、子どもに正しい情報や教えをしなけ

ればいけないのだと感じた。

### 2-2 部活動関連 3名

- 13 私は体育会の部活だったので、怒鳴られるのは普通だった。当時は嫌であったが、今思うと厳しくされて良かったと思っている。今、生きていてその時より辛いことは起きていないし、どんなに忙しくても辛くても、あのときに比べたら全然マシだと感じ、何にも負けないメンタルが身についたと思っている。怒鳴ることや怒ることはよくないと今回学んだが良い点も全くないことはないというのが私の考えである。例えば、部活内での練習の空気が締まるという恩恵を部活の部長として受けていた。昭和の考えに洗脳されているのかもしれないが、このような形も正しいのではないかと思った。何が正しいのかわからないが、怒鳴らなくても伝えることはできると思う。

このような考えは改めるべきかと自分自身考えさせられる授業だった。今の私があるのは厳しい部活があったからだと思っている。最近の人はメンタルが弱いと言われているが、昔の人が強いのは、怒鳴られた世代だったからではないのかと疑問も生じた。

- 14 自分の中学・高校生活をふり返ってみると、生徒指導の先生のイメージは怖い女性の先生やおじさん先生がやっているというイメージだ。これらの先生は生徒の声に耳を傾けてくれず、一方的に決めつけて来ることがあった。もっと先生全体が耳を傾けて話を聴いてくれれば良い生徒になっていくと思う。「怒鳴ることがよいことではない」と言われているが、自分の性格がヤンチャだったこともあり、よく怒鳴られ、怒られていた。自分の父も怒鳴って怒ることが多い人である。今回の授業で言っていたが、怒って指導するのはいつでもよくないことだとわかった。部活で剣道をしていたが、先生の指導のおかげで強くなれ、心も成長することができたと考えている。日本の和を学ぶにはときには強く指導することも重要なのではないかと授業を受けて思ってしまった。

- 15 「不適切な指導」の中に大きな声を出して怒らないというのがあり、それはその通りだと思う。しかし、部活動の場合など、チームで動いて、チームでひとつの目標に向かってのものに対して、同じ方向に向かっておらず、別のベクトルに向

いている生徒は叱る必要があると思う。私は中学では陸上部で、とても強い時期であり、顧問も厳しい人であった。準備や片付けが遅れていたりするとすぐに怒られた。怒られているときは嫌だなと思っていたけれど、成長するにつれ、メンタルが強くなり、何にでも挑戦できる生徒になれた。「怒られる」ということをプラスに変えるのかマイナスに変えるのかは自分自身であり、怒ると成長する生徒なのかどうかは教師が見極めていくべきあるが、一概に「大きな声を出して怒ること」を悪と捉えなくてもいいと思った。

### 3. その他 14人

- 16 大声で怒鳴ることがマルトリートメントでよくない。もちろん言っていることは分かるし、納得もできる。でも同時に難しいことだと思う。私は中高6年間男子校だったのだが、男子校の中学生を言葉で諭すことはほぼ不可能だと見て思っていた。もちろん、それで間違いを理解する人もいるが、大抵の場合はむしろなめられてしまう。実際、どの先生も声を荒げていた。しかし、その中でも私の担任の先生は工夫して何とか私たちを諭そうと言葉を伝えてくれていた。そんな先生でも年に数回は怒鳴っていた。現実的に考えて、時と場合にもよるが、怒鳴ることも必要かもしれないと思ってしまった。その先生はよく「怒鳴られて学ぶのは動物に対するしつけと同じ、人なんだから頭で考えて理解してほしいとおっしゃっていた。今なら、もちろんその通りだと理解できるか、当時、私たちには分からなかった。でも、そういうもので、後に理解できれば良いと私は思ってしまう。時には怒鳴ることも許されないのか？」ということが知りたい。
- 17 私も過去に「不適切な指導」を見たことがあるため、自分がそのような指導者にならないようにこの授業で学んだことを身につけて将来に役立てたい。
- 18 (両親が教員) 私の父は初任でヤンキー校に配属されてしまったからなのか、叱る際に結構怒鳴る。母がマルトリートメントに反対で、何度も父と話し合い、最近あまり怒鳴らなくなった。私は個人的に、父などの怒るときに大声を出すタイプの人自分の気持ちをうまく言葉にできないことが原因で怒鳴ってしまうのではないかと

と思っている。教員だけでなく、どんな場面でも相手を萎縮させ、言うことをきかせるという方法は間違っていると思う。自分の気持ちを言語化できるようになるために、幼い頃から訓練していくべきだと思う。

- 19 指導する際に体罰をするのはもちろんよくない指導方法だが、だからといって優しすぎたり指導しなさすぎても、教師と生徒という関係が崩れてしまうと感じた。しかし怒鳴ったたりするとその場や即時での指導効果はあるが、長い目で見ると生徒の心理的恐怖によって指導するよりも、冷静に生徒と対話するように指導すると良いと感じた。
- 20 「大声で怒鳴る」「事実確認が不十分なまま思い込みで指導する」といった不適切な指導があったことに驚いた。小さい頃から大声で怒鳴られてしまうと恐怖を覚えたり、その先生に対して心を開きにくくなってしまわないかと考えた。
- 21 生徒指導提要の改定において、「不適切な指導」について初めて言及されたという部分はとても重要だと思った。大声で怒鳴ったり、事実確認が不十分なまま思い込みで指導したりするのは意味がないと思っている。そういった場面を小・中・高校のときに見ることがあったので自分がそうならないようにしたいと思う。
- 22 不適切な指導や大声で怒鳴るなどの指導は最近見られなくなったと感じている。怒鳴らなくても指導できるという考えが広まったのかと思う。
- 23 小学生のとき、私は「叱られる・注意される＝怒鳴られる」であったが、学年が上がるに連れてそう思う機会は減っていった。今思えば、精神年齢が大人になったこともあるとは思いますが、社会の考えが変わりつつあったのだろうと今回の授業を通して感じた。
- 24 今日は指導の仕方について考えてみた。指導の仕方について最近厳しくて、すぐに体罰やハラスメントとして問題になってしまう。優しく指導しても、小さい子などはやんちゃな時期であつたら、言うことを聞かないかもしれない。どこまでの指導ならいいのか、人によっては怒りすぎてしまう人もいると思う。

25 大声だったり行動だったり、すごく厳しい先生の部活でつらい思いをしていた友達を見てきたりして、今日の授業で「不適切な指導」として明記されたことを知って、もっと教師がこういう細かいところまで、いくつになっても忘れずに指導していけるような教育現場を作っていきたいと感じた。

26 授業で出てきた「不適切な指導」について「大声で怒鳴るのはいけない」というのは必ずしも生徒に対してだけでなく、教員同士でも気をつけていくべきものだと思う。  
生徒が精神的にも健康に育っていくためには、まず教師側のストレスを減らしていくことから始めるべきだと思う。「怒る」のではなく「指導し理解してもらうこと」を優先していくべきだと考えた。

27 怒鳴って叱ることは生徒からしたら響くかもしれないが、語りかけるように叱ることは本当に響くと思う。これは私の経験談である。叱り方が上手い先生というのは、生徒自身に何をしてしまったのかということの自覚させるのが上手い先生だと考える。怒鳴るといことは、先生から生徒へ一方的に主張することであり、生徒の主張をねじ伏せることと同じである。そのため生徒は深く鮮明に振り返ることはできない。しかし語りかけるように理知的に怒る先生は、生徒自身になんで？ どうして？ と問いかける。そして発言させる。そのため嫌でも振り返らざるを得ないような状況を促すことができる。私は怒鳴るようなことはしないし、できないと思う。

28 マルトリートメントに関する問題については、すごく共感できた。スポーツをしていても、失敗したら怒られるのではないかとプレッシャーを感じていたときとある程度自由にプレーしていたときではパフォーマンスに明らかに差があった。教育に対する強い責任からこういうことが起こるのかもしれないが、よくないことだと思う。

29 自分が中学生のとき、怒鳴られた経験がある。そうやって怒鳴られたからこそ、自分の誤りを認めることができ、今の自分につながっていると考えている。自分の性格上、教員になってから、怒鳴るといことはできなさそうなのだが、そういう指導も必要であると思っている。しか

し、今見返してみても、生存者としてのバイアスがかかっているようにも思われる。その指導で、よくない方向に進んでしまう子がいる可能性を考えるべきだと、この授業を通して感じた。

#### 資料2 不適切な指導と考える例

- \* 生徒指導提要 令和4年12月(2022年)より抜粋
- ・ 大声で怒鳴る、ものを叩く・投げる等の威圧的、感情的な言動で指導する。
- ・ 児童生徒の言い分を聞かず、事実確認が不十分なまま思い込みで指導する。
- ・ 組織的な対応を全く考慮せず、独断で指導する。
- ・ 殊更に児童生徒の面前で叱責するなど、児童生徒の尊厳やプライバシーを損なうような指導を行う。
- ・ 児童生徒が著しく不安感や圧迫感を感じる場所で指導する。
- ・ 他の児童生徒に連帯責任を負わせることで、本人に必要な以上の負担感や罪悪感を与える指導を行う。
- ・ 指導後に教室に一人にする、一人で帰らせる、保護者に連絡しないなど、適切なフォローを行わない。

#### 参考文献

- 村中直人 2024a <叱る依存>が止まらない 紀伊國屋書店
- 村中直人 2024b 「叱れば人は育つ」は幻想 PHP 新書
- 藪下遊 高坂康雅 2024 「叱らない」が子どもを苦しめる ちくまプリマー新書
- Paul Dix 著 森本幸代訳 2024 子どもは罰から学ばない 東洋館出版社
- 今津孝次郎 2014 学校と暴力 いじめ・体罰問題の本質 平凡社新書
- 文部科学省 2022 生徒指導提要  
[https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt\\_jidou01-000024699-201-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf)
- 最終閲覧 (2025.1.11)